

## 論文要旨

氏名 \_\_\_\_\_ 石村 華代 \_\_\_\_\_

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

\_\_\_\_\_ <食>の教育思想史的研究：フレーベルの食育論 \_\_\_\_\_

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。  
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

本論文の目的は、フレーベル（Fröbel, F.W.A. 1782-1852）の食育論を中心にして、それを他の思想家の食育論とも対比しながら、西洋の保育・教育思想の中でどのように＜食＞が捉えられてきたのかを明らかにすることである。

2005年に食育基本法が制定され、食の営みを体系的で組織的な教育・社会システムに包含しようとする動きが、よりいっそう加速化している。一方で、食にまつわる言説を批判的に検証する必要性も生じているため、食育を思想史的に解明することが求められている。これまで哲学・思想の領域では、私たちにとって最も身近な生理的、心理的、社会・文化的現象の一つである食が、研究の対象としてほとんど取り上げられてこなかった。また、食育研究においても、自然科学的なアプローチがかなり優勢であり、さらに人文・社会科学系の中でも、教育学的な研究、とりわけ教育思想史的なアプローチでの研究が少なかったという事情があるため、その充実が期待されている。

今回、先行研究の検討を行った結果、以下の二つの欠落が存在していることが分かった。①フレーベルの食育論全体を俯瞰するような研究成果が出されていないこと。②フレーベルの食育論を歴史的な文脈に位置づけたり、他の食育論と比較したりするような手続きが行われていないこと。よって本研究では、このような状況を補完し、フレーベルの食育論の全体を多角的な視点で捉えることを目指す。本論文では、その目的を達成するため、フレーベルの食育論から、食事（第2章）、味覚（第3章）、労働（第4章）という観点を抽出し、それぞれの観点から彼の食育論の全体を徐々に浮かび上がらせることを試みた。また、近代の教育思想家を中心とする他の思想家との比較を通して、フレーベルの食育論の特徴を明らかにしようとした。

第1章では、第2章から第4章までの内容の基礎をなす、フレーベルの生涯とその思想を4節に分けて概観した。まず、青年期までの生活とその学習経験（第1節）について述べた後、教育者としての出発とペスタロッチとの出会い、基本概念である球体法則の発見、そして、その後しばらく続いた遍歴生活をたどる（第2節）。次に、約14年間「一般ドイツ教育施設」（「カイルハウ学園」とも呼ばれる）での教育実践に携わり、それをもとに主著『人間の教育』を著した時期に焦点を当てる（第3節）。さらに、フレーベルが幼児教育への関心を深め、積み木の原型である「恩物」を開発し、ついに「一般ドイツ幼稚園」を設立した経緯を描く。彼は『母の歌と愛撫の歌』の執筆など、最後まで精力的に活動したが、幼稚園禁止令などにより、その晩年は苦境にも陥っている（第4節）。

第2章では、『人間の教育』における食事論について分析した。第1節から第3節では、乳児期の食体験としての「哺乳」について論じた。フレーベルは乳児の発達にとって、「良質な印象の享受」「身体の適切な使用」「共同感情と自己意識の芽生え」の3つの要素が重要だと考えていた。彼によれば、外部から様々な印象を「のみこむ」段階である乳児期には、母乳育児を通して、母親のまなざしや、その柔らかく満たされた表情などから好ましい印象

を受け取ることが大切である。また、授乳―哺乳という相互的行為を通して、母子間に愛や喜びという「共同感情」を育むことも、その後の人生における健やかな発達を支える基盤となる。フレーベルの議論で特徴的なのは、母子間の絆をおよそ本能的なものだとみなした、ということである。授乳とは、母子間の自然なつながりによって行われる行為であって、それは、単なる習慣でも、道徳的な義務でも、医学上の理由からの必然でもない。むしろそれは、予感する存在としての乳幼児に肯定的な印象を与え、その成長を促す行為であり、また、母子間に喜びや幸せなどの正の相互感情をもたらす行為でもある。ただし、幼児期における食事のしつけと同様、子どもが必要以上に欲する場合、その欲求には応じるべきではない、と彼は考えていた。

第4節から第6節では、幼児期の食事論を取り上げた。大人は、幼児期には「ことば」と「遊び」によって内的なものの表現を促すだけではなく、「外的なものの象徴的な内化」の作用としての食事を通して、その精神的な発達の基礎をしっかりと形づくるべきである。子どもには、食事を単なる「栄養の手段」だと認識させ、質素でほどよい食生活を習慣づけ、節度ある振る舞いを身につけさせなければならない。このようなフレーベルの食事論には、ロックの禁欲主義、人工的なものへの嫌悪と自然なものの称揚というルソーの思想からの影響が見られる。また、フレーベルの従軍体験が「節制」という価値の強調に結びついた可能性も考えられる。さらに、フレーベルの食事論に特徴的なのは、「魔術的内部化」という素朴な信念を自らの形而上学に取り入れながら、子どもの食事内容がその感覚や感情にも大きな影響を与えると考えていたことである。

第3章では、これまでの教育思想史で看過されてきたフレーベルの味覚論や味覚教育論に着目した。第3節では『人間の教育』を分析し、味覚が「より静的で液体的なもの」に分類され、嗅覚と一対のものとして捉えられていること、しかしこの段階では、感覚一般、個々の感覚、また、それらの教育的な意義に対する見方が深められていないことを確認した。

第4節以降では『母の歌と愛撫の歌』を検討した。フレーベルは同書で、母親の声を介して、子どもが自己の身体へと目を向けるように促している。各々の身体部位と、そこで出会われる個々の感覚様相は、いずれも別々のものとして分離されているのではない。それぞれの身体部位の協働や、統一された身体ないし生命としての自己知覚によって、人は世界へと働きかけることができるし、また、様々な感覚による相互作用によって、世界は人に味わわれるのである。

第5節第1項では、「遊戯の歌」第5編「味の歌」を分析した。人は感覚を通して世界と出会い、その精神が対象を認識するための下地をつくる。一方で、あらゆる対象は「神的なもの」を宿しているのだから、私たちの感覚が十分に研ぎ澄まされていれば、私たちは、その事物の本質としての神性に触れることができる。私たちは様々な感覚を働かせながら、ある事物を注意深く観察したり、それと他の事物との比較によって両者の結びつきや違いを

見出したりして、事物の本質を敏感に察知できるようにすべきである。ここでいう感覚とは、視聴覚や触覚に限られるのではなく、味覚や嗅覚も含んでいる。食べ物についても、味覚や嗅覚などを働かせて、その人にとって好ましいものと、そうでないものとを味わい分ける必要があるし、酸味や苦味など、好まれにくいけれども有益なものについては、母親などが食べるように促していく必要がある。また、ドイツ語の *Geschmack* (味、味覚、趣味、審美眼) の多義性にも表れているように、対象を「味わい分ける」能力は、適切な趣味判断や倫理的判断の素地にもなる。よって周囲の大人は、様々な味わいの体験を通じて、子どもが味覚などの感覚を鋭敏に働かせ、品位ある趣味を形成し、倫理面での発達にも影響を与えられるよう働きかけなければならない。

第5節第2項では、「遊戯の歌」第39編「においの歌」の解釈を通して、これまで低級感覚とみなされてきた嗅覚や味覚には、対象との共鳴によって、対立する二つの項を融合させ、両者を一つのものとして体感するための役割が期待されていること、感覚教育の遂行は「自然からの愛」「母からの愛」という二重の愛によって保障されていること、が分かった。さらに第6節では、コメニウス、ルソー、ペスタロッチ、ジャン・パウルの味覚(教育)論と、フレーベルのそれとを比較した。その結果、フレーベルによって教育思想史上、おそらくは初めて、味覚や嗅覚に積極的な意味が与えられ、それらの感覚を洗練させることの重要性が認識されたことが明らかになった。

第4章では、フレーベルが、主に『母の歌と愛撫の歌』で描いた食に関する体験活動を、手と労働の視点から明らかにした。

まず「遊戯の歌」第7編「草刈り」では、ある行為が他の行為によって支えられており、いくつかの行為や作用が連なり合って「生活の鎖」を形成しているという、世界の在りようが描写されていることを確認した(第2節)。第3節では「遊戯の歌」第3編「塔の風見」を分析し、ある現象の背後で動いている力を察知することが、あらゆる現象のつながりである「生活の鎖」を予感するための準備となることを説明した。フレーベルによれば、子どもが「生活の鎖」を感得するためには、知的な能力を高めるだけでは不十分である。子どもは、労働の身体的ミメシスとしての手遊びあるいはその発展としての作業を通して、自らのいのちを支える「生活の鎖」の存在に気づき、世界の全体的な成り立ちへの理解を深められるように導かれるべきである。

第4節ではフレーベルの労働観に着目し、人間が神の似姿であって神と同じように創造性を有していること、そのため人間は労働によってその神性を表現すべきであることを確かめた。このような労働観に基づき、彼は、すべての幼児が、毎日少なくとも1時間ないし2時間は、作業ないし遊びを通じて何かを創る活動に没頭すべきだ、と考えていた(第1項)。フレーベルによれば、人間による労働こそが、この世界の「生活の鎖」を成り立たせる。ま

た、その労働は「生活の鎖」そのものを根底で支える神に対する信仰と、固く結びつけられていなければならない（第2項）。

第5節では、フレーベルの消費者教育論を取り上げた。商品と貨幣との交換は、経済生活を成り立たせる基本原理であり、子どもが自分で市場に買い物に出かける経験をすることもある。その際に、フレーベルは時折「その商品がどのように生産されて売られているのか」を子どもに知らせ、「生活の鎖」に気づけるよう働きかけるべきだ、と述べる。本節では、これまであまり着目されてこなかったマルクス主義とフレーベルとの接点にも目を向け、商品経済が浸透し、労働の機械化や細分化が進行する中で、フレーベルが労働の創造性と全体性を守ろうとしていたことも明らかにした。

第6節では「遊戯の歌」第12編「お菓子をびちゃり」を読み解いた。母子関係が菓子職人の登場によって深化すること、「生活の鎖」概念が「遊戯の歌」第7編「草刈り」とは別の形で、この作品でもう一度取り上げられていること、について述べた。

第7節では、フレーベルが子どもの活動として庭づくりを重視していたことに注目した。そして、子どもが「部分的全体」として果たすべき役割を自覚するとともに、植物をはじめとする存在者の生のサイクルを学ぶ場として、庭を位置づけていることを示した。

第8節では、「生活の鎖」と、フレーベル教育思想の中心概念である「生の合一」との相補的な関係性に焦点を当てた。「生の合一」が融合的な体験であるのに対して、「生活の鎖」では、それぞれの要素が一体でありつつもそのまま残存している。よって後者は、つながりをつずつ確かめ、その因果関係を知的に理解する可能性にも開かれている、と言える。

終章第1節では、第2章から第4章までのフレーベル食育論に関する記述から得られた成果を示すとともに、現代的な視点からの捉え直しによって、フレーベル食育論の意義と課題を明らかにした。

第2章で扱った乳幼児期の食事論の内容は、現代社会では、なかなか受け入れにくいだろう。母性の自然主義に立脚するフレーベルの母乳育児論を、現代においてそのまま適用すれば、母子にとってリスク要因となることも想定される。また、食事を単なる「栄養の手段」とする『人間の教育』における食事論は、多くの人にとっては過度に厳格なものとして映る。むしろ現代においては、味覚教育論などの思想的な文脈でも、「ほどのよさ」を大切に、食による幸せや楽しみを素直に受け入れようとする価値観へと、一般的には転換しているだろう。

第3章の味覚論については、食生活の合理化や食の工業化、嗜好の偏りなど、現代社会における味覚の「貧困化」という社会的背景のもとで、フランスやイタリアを発信源とする味覚教育への関心が、今、世界中で高まっている。このような現代の味覚教育論と、フレーベルのそれには共通点もある。フレーベルはすでに、現代の味覚教育に共通する基本的な枠組み、つまり食べ手と食べ物との関係形成の重要性に気づいていたし、感覚が健やかに育成されれば、子どもには「明るさと意欲と喜び」が湧き上がるはずだ、とも述べていた。さらに、

食べ物を「味わい分ける」能力は私たちの品位の形成にも資する、と彼は考えていた。そして、現代の味覚教育も、このような味覚と趣味や倫理とのつながりについて、共通して言及している。一方、違いとしては、母親以外の第三者との「共食」の意義に言及していないこと、子どもが味わいを言語で表現することの意義については語られていないこと、が挙げられる。

第4章については、資本主義社会がより一層に高度化し複雑化するにつれて、私たちの食生活は断片化され、「生活の鎖」の存在を感知することが困難になっている。しかし、私たちが自分の食べるものを、それぞれの個人や集団の能力や状況等に応じて、しかしできる限り自分たちで生産・加工・調理すること——これによって、私たちは「生活の鎖」を可視化したり実感したりする機会をもつことができるようになる。「生活の鎖」に自覚的な大人による家庭やコミュニティの構築によってはじめて、子どもたちの「生活の鎖」への気づきも促される。

家庭では、大人は子どもの意欲を温かく見守りながら、子どもが幼いうちから様々な手伝いをさせた方がよい。また、園や学校でも、連続的で全体的な食の体験活動を提供し、「生活の鎖」への予感を喚起するべきである。子どもが作業をする際の、対象への没入は、「生の合一」の体験を生み出し、外界との驚きにみちた出会いをもたらす。このような出会いは、自己を超えた世界の在りようを認識するための糸口となり、「生活の鎖」への気づきを促す契機にもなりうるのである。ただしフレーベルのいう「生活の鎖」は、あくまでもロマン主義に彩られたものであり、土中での分解の働きなどに目を向けようとしなかったため、一部が欠けたままの状態である。排泄や分解のプロセスにまで目を向け、ごみや排泄物を処理する人や、土壌の生き物たちの働きなどを含めた、より広い「生活の鎖」を感じ取れるような庭づくりの取り組みが、今、求められている。

終章第2節では、「フレーベル研究」「食の西洋教育思想史」「現代の食育論」という三つの観点から、本研究の課題と展望を述べた。今後の展望としては、まず、フレーベル研究としての正確さや着実さを追求するため、草稿や書簡などの未開拓の資料にも目を向けたい。また、本論文ではわずかしか検討できなかった他の思想家の食育論についても考察を深めたい。さらに、フレーベルが言及しなかった食と食育をめぐる課題についても改めて取り上げ、食と環境問題との接点を軸にしながら研究を進めていきたい。

本研究は、フレーベルの食育論に初めて本格的に取り組んだものである。それによって、これまでほとんど見られなかった、教育思想史的なアプローチによる食育研究の端緒を拓くことができたのではないかと考えている。フレーベルは、味覚を「味わい分ける」能力として捉えたこと、味覚と嗅覚に「対立するものの統一」という機能を見出したことにより、これらの感覚を肯定的に評価し、それにともなって表れる喜びや楽しみといった情動にも、温かなまなざしを向けることができた。また、食を労働やその循環、あるいは消費生活という観点から論じるとともに、庭づくりなど食にまつわる身体的な活動を、教育にとって必須

のものとみなした。食と同様に、労働や教育は人間にとって不可欠の営みである。フレーベルは、その教育実践の中で、これらの連関に気づき、その連関への思索を深めたという点で、食にまつわる哲学・思想にも大きな足跡を残していると考えられる。

また、本研究をフレーベル研究として捉えた場合にも、哺乳論を主題的に扱った研究は、管見の限り存在していないし、彼の食事論は紹介だけにとどまっており、その詳しい解釈や、他の思想家との比較による特徴の抽出がなされてこなかった。味覚論についても同様であり、本研究で、『人間の教育』から『母の歌と愛撫の歌』への感覚論の発展過程に着目したり、後者の著作での個別の感覚様相の意義について検討したりしたことで、フレーベル教育思想の新たな側面に光を当てることができた。労働論では、「生活の鎖」という概念に注目し、この概念を「生の合一」と関連づけたり、消費生活という観点からも分析したりした点が、本研究の特色と言えるであろう。以上のことから、本研究では、伝統のあるフレーベル研究にも、わずかばかりの厚みと広がりをつけ足すことができたと思われる。